

461

乙

視天居士著

浮世からくり

明治十七年三月出版

027281-000-3

特52-206

浮世からくり

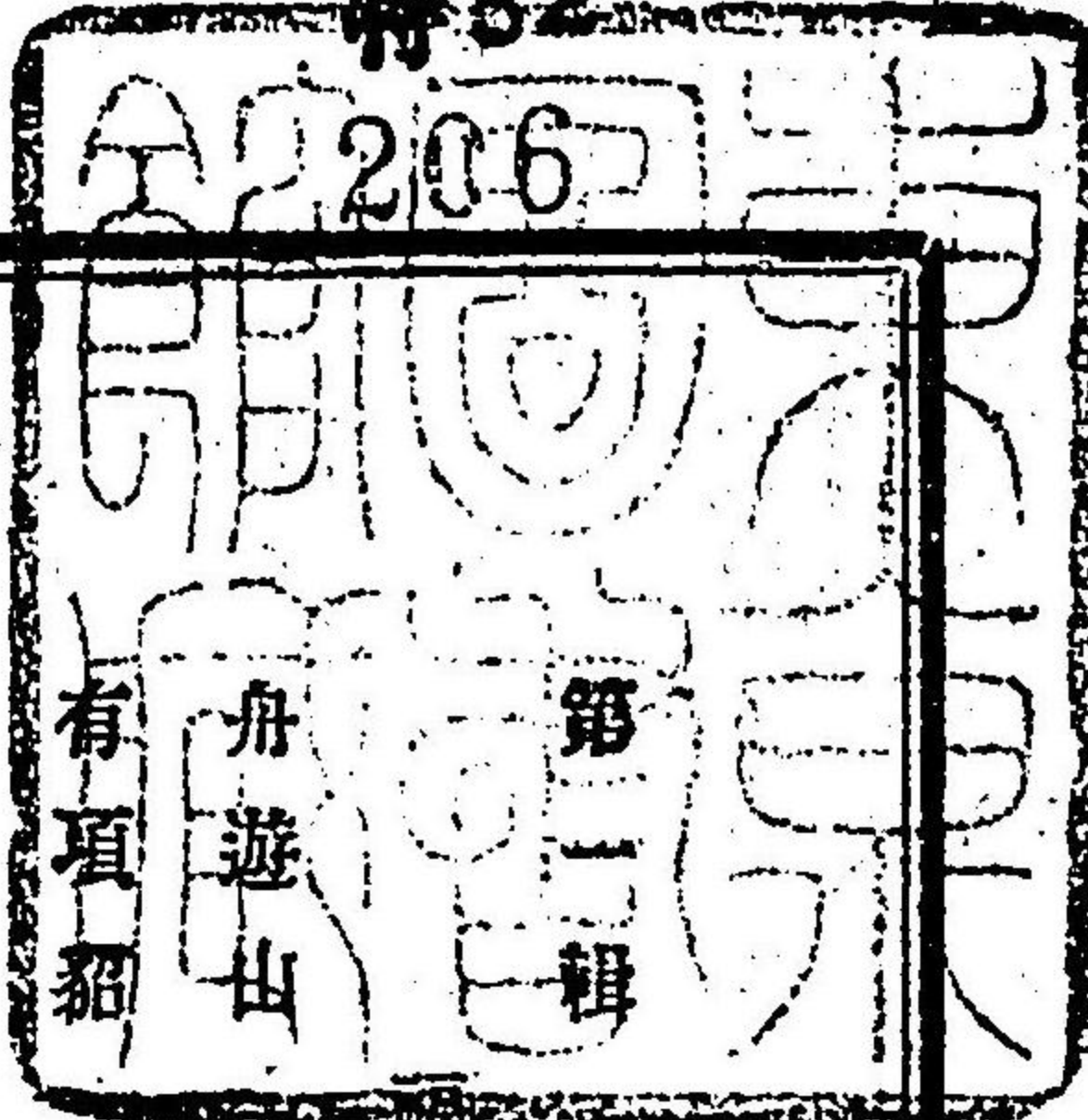
視天居士/著

M17

ADJ-0009



特52



目録

福祿道

於止麻利の社

佐賀森

於ヒヤヲ菓子

暴墮落

難會道

箱城寺

踏張太

苦戰山

玉霞

秩祿道

秩祿山公債寺

ツマ蘭

奉還山

因循

仕方梨子

愚鈍氣

世業道

...

思澤山 無能興行 移住寺  
後悔 婦田

二

浮世からくり

東都 眼天居士 著

○ 福 祿 道  
歡淫國より始め鈍澤山遊山寺等に至る道にして官門あり  
これを其の境界となす此國富者群を爲す故に他の貧苦を  
知らず鹿食鹿衣を識らば浮世の中の極樂世界酒色遊興衣  
服調度活計歡樂心の儘を盧生の榮花を眼前に尽くそ凡る  
何一として足らざるものなし常に銚子の濱に舟を浮かべ  
酒の海に碇を却ろし驕の社を願拜して夜を明石の浦より  
於止麻利の社よ通夜を爲し日曜の妓と約して戯場にあそ  
び又た或時と美人草の花壇に吟行すれば虚空に黄金の花  
降りて音曲かまびすしく願ぶる常盤木の樓に綾羅錦繡を

幽ひたる天女の如きもの降下り小蝶の舞を奏して衆客の  
膝を湯かじ夜坐闔中に入りて白沙の肌へ雪をわざむき  
岷山の眉を秋月に半輪にひとしく靈香馥郁として薫じ雲  
と成り雨となる巫山のたのしみ四季の詠を一時に尽くす  
築花結搆究まりあし是れ皆な銚子の濱酒の海に遊ぶ風流  
才子の形勢なり此海水漢主に唐茶と唱へ天竺にての盤  
若湯と云ふ佛は是を甘露と名づけ李白の滑稽で掃愁湯と  
し神國にせり不老不死の神代酒と稱ふ一度此水に浴する  
とさひ忽ち大家富饒の志に變じ寶の山に昇るが如し心地  
せしむる寶に神變不思議の靈水あり此海中に一の舟遊山  
あり

舟遊山 此山は酒の海の浮島に在り居ながら自在の歡樂

と尽くを煌々たる陽和之と仰るを翠簾霞の如く更に之を  
眺めば銀浪平らにして數千疊に坐するが如く遠浪岸波  
松風に比して美人笑ふとき春鶯囀り梅花緑の黒髪より薫  
せ爛熳たる花艶碧潭に影じて梢を漕入るれども亂落滅却  
せせ酷暑炎熱居ながら避け涼風肌を晒らして流汗を忘る  
れ牡丹と雲に包めども聲散じて衆耳を喜ばしめ金風孤  
を送りて玉兔片雲なく月華手にとるべく猿猴是れを望み  
しも亦宜なり琪花遙りに望めば嶺巖富峯を欺むき風は飛  
雲を吹きて夜村を埋め人の草慮に入て深く門を閉せ老樹  
濛木悉く花と疑ひ壓竹脆にして地に垂る日は爐火能き  
程に重衾梅風に世の寒を知らせ凛々たる凄風處を犯さ  
寧ろ醉眠の醒むるを是を勝景心意を悦ばしめ築花志を

轉ず鳥中自ら美味珍膳酒色及び山海の佳品を生じ夜の燭  
 を点して白晝に異ならず實に一種の仙境にして今前にあ  
 るかと思へば忽然として後に浮かぶ心の欲する所ろに隨  
 て絶景佳境も八臂の如しまた山中に佐保姫に等しきうた  
 姫と云ふ仙女ありて能く陰陽の術に長け藤八及び諸  
 の拳術を行ふこれに心を奪はるゝもの多しとなん  
 於止麻利の社とほのくと明石の浦と人麿の社なりこま  
 いほのくと夜を明石の浦なまみ山鳥の尾りながくと  
 幾く夜も二人かもねんど誓ひなふ御歌に  
 ほのくと夜をや明石の浦なじみ  
 今日あへりゆくかけおしぞ思ふ  
 扱又本尊の新造二十五歳夜晝太夫部屋持卿の寄附により

てアリス國は嘲哂禪師自作の像を建立す  
 佐賀森 此森の銚子の濱邊に澤山あり此森に一種特別の  
 草あり其の形ち盆の如く花金銀の様に實はグァンポー  
 ん似てたむひ梨子にも似て甚たたわひなし  
 有頂貂 此れも佐賀森に住む獸にして音曲と好む興に乗  
 し頻りまかけ廻り立願ふこと自由自在なり其形跡にまだ  
 らけなく手を打鳴らし辯問をたゝき頬べたをなめまた口  
 をすひなどし變痴奇な聲をして君——と叫べばチヤソ  
 ウデンスカなどゝ鳴くこと妙なり  
 於ヒヤラ菓子此國の商人達の能く製造するものにして至  
 つて賣れ口よろし然れども能く喰み入るれば其味知れて  
 人々再び食はずとあんな

暴墮落此魚酒の海にて産すクニヤとして何れ用に  
も立たせ又た何の害にもならせ此魚一たび寝むるときに  
食物も忘れて起きせ

◎ 難會道

忠誠國より苦戦山籠城寺に至る道あり入口に一心貫と云  
ふ關門あり此關門鐵壁の如くにして容易に入るふと能は  
せ又た此國の難場多く特に虫魚の類夥多し人をして驚  
怖せしめざるのなし忠憤義膽忠節なんぞ稱ふる武士國中  
よ義士と充ちて殆んど立錐の間なし皆な剛原なる竹  
藪に住む此むし性強情にして勢ひあなどりがたし人若し  
銳鋒利刃を以て之れと驅逐せんとすれば忽ち其敵中よか  
くる加ふるに脱草あたりにはびこりて大に驅除の妨げを

なほ此草金鐵の如く閃々として肉眼あざの中々及ぶべか  
らざる一種の變的なる草なり全躰此むしにも又大忠小忠  
の別ありて各々其党中を總理するものなりと云ふ故に一  
國の情勢に能くも似たる所ありとかや此むし常に君臣一  
致上下合体して一体分身の如く清白潔明にして天下晴れ  
て少も曇らば正義堂々として刀折れ玉尽きいさたよく  
敵しがたきを知ると雖も他の援兵を頼まば獨り孤城を守  
りて自若たり昔日後醍醐天皇を守護して雲中の櫻樹へ天  
勿レ空勾賤時非無范蠡と記したる備後の三郎兒島高德にも  
おさへ恥ぢざるべく吳子胥楠公にも比敵すべし是れ將  
さに大丈夫れ心腸を寫出するに足るべき乎彼れ既に國家  
の法度典刑と察能するの兇徒なり然れども其心情を察す

るときは固と是れ慈善義侠の爲めのみ何すれそ一身の私利に汲々たるものと日を同あして語るべけんや實に士道の龜鑑どころ賞歎すべけれ嗚呼時なる哉然れども寡の衆は敵しがたく弱の強を凌ぐ能はざるは物の數にして又た人事の奈何ともする能はざる所なりと云へ終に刀折れ丸尽き勢ひ究まりて一身容るゝ地なく苦戰山籠城寺に沈落せし抑も又憐むへく歎きべきの至りならせや若戰山籠城寺降人天王の説得年中の開基にして本尊の義者門天並に存在天下泰平報國祈禱の爲の俠義菩薩の憤作なり刑法年中に至て本堂の内に安置す次でなみだ如來立たせ賜ふ扱又本尊の苦戰山中にあるを以て種々奇異のものあり固と此山の四境の皆な名だゝる山脈を以て

園こみ接戰山奇兵時伏兵嶽加勢峯等あり皆奇嶮峻なり人若し此山に登るときは艱難辛苦進退維谷むると云ふ踏張太此虫バつたに似て惣身に兜の摸様あり手足の劔の如く敵に對して一寸も跡へ引かず終にいさかよく身命を抛つ古人之れを稱して義虫と云ふ一心奮闘此らん敵國へ向つて生育し少しも脇身をあら定千辛万苦してたとへ根を絶ち葉を枯らそと雖も是を厭ひ定其花至つて芳しき匂ひあり普く國中に薫定玉霰此あられ晝夜絶間なく降りて止まき若し夫れみれに觸るゝとき忽ち絶倒する事甚だわやうし其猛烈なるに至りては鉄壁も碎き堅城も破ぶるの勢あり此もの防ぐ事うたし地を穿つ程頭を下け色バたまゝ遁るゝなり嗚

呼危ひ哉

○ 秩 祿 道

飛鳥川昨日の淵の今日の瀬と變りる榮枯盛衰の定めなき  
 實に浮世の習として是非もなきことなりし茲は如何なると  
 ころぞや其名も知れし秩祿道東西南北縦横十文字至ると  
 ころ行く所右も左も飛鳥川是ぞ徳の川は支流なり川中遇  
 岸頗ぶる多く五人ふち十人ふち等の稱あり水勢激湍宛な  
 ぐら閃々たる白刃の如く平人あどの中々仰見見るをも得  
 る能ひざる所なり十滿つれば缺くる世の習ひと云ふも  
 の、茲に減祿年間に當て一天俄々に曇り風波激して益々  
 止まず震動猛にして愈々制そへからず遂に地割れ水溢れ  
 淵岸没落して忽ち大瀬と變ぜしと予次で人民の狀態如何

を視へむ此の震動のために壓倒せられし家屋其幾百万戸  
 なるを知るべからず長幼相救ひ老壯相助け手取り杖とり  
 奉還山へ遁がるあり金祿山に逃くるあり其他歸商歸農  
 の諸嶺に走遁せし者其數又知るべからずとなん家財の更  
 なる着替の一つも餘さばこそ昨日まで高麗錦の其上は榮  
 耀榮華の生活を爲して花晨の嵐月夕の雲より外は世の中  
 に憂きこと知らず居たる身の今日の襤褸の衣一重影も形  
 もなき瘦世帯炊く烟の絶へくある昨日の家老も今日の  
 學校教師と變し朝の眞様も夕にのお三を兼ねる世の中と  
 なりしに借てもあはれなることならざや  
 奉還山 此れは其の先きに金祿山と云ひし山して減祿年  
 間の變事ありし其時に當り人々急を逃れんとして登りし



所なり此山に登らんとするに己印形菩薩のお守札を携へて行く然らずば頂きよ達すること能はず此山の他山とちがひ氣候温和にして凌沓易しと雖も長く住する時の必定究迫病に罹りて苦しむ又歸尙山に登る者は多く流行の奸商疫に觸れて苦しめらる兩疫とも中々油斷の出来ぬ激疫なりこれがため二つとなき命をも奪はるゝもの少からず國人此病にかゝる時の直ちに安位受庵と頼みて其病を療治せると云安位受庵直ちに其病狀に従て其藥劑と與ふ奇藥あり曰く

半人膏 警仕水 棒丹 學校丸 商社圓

右病狀の輕重よ従つて服用せしむ然るときは能く治すと云ふ

秩祿山公債寺 減祿年間維新法師の建立にして本尊と素と御藏渡大明神を祭りし跡なり今時再建してより財政困難大師利子菩薩を安座し奉つる此國人多く其証書を持つ毎年二度御開帳あり人々其日を俟つや殆んど一日千秋の思を爲す故に其期日に至れば我れ先きくくと競ふて参詣す御利益至つて多しと云ふ

たい屈 此寺の後ろよわし胡座をかき或の寝たる姿あくびを爲したる風の岩室にして食大師喰大師の二師安坐し玉か

ツ 蘭 びよろくとして懐手したる体にして其花のうつむき鬱々として日をくらす

愚鈍氣 此草藻くきに似て只ば九やうとして何の役にも

立たせしむる時なきには却て邪よこしまなるものなり  
 因循いんじゆんにんぢんに似て少しも味あじわひなし兎角とがくに延のびびかゝつて  
 の止やみ花はなを持たんとして其まゝになり何の効能くわうにんもなく些  
 とも役に立たぬものなり  
 仕方しほう梨子りしたましく花はなをさうせ實みなりても振向あやむきもせを其  
 まゝにしのびて仕つかまふ甚おぶ不便ふべん無用むじゆうの藥物やくぶつなり  
 此道このみちの我われ愛國あいこくより移住いぢゆう國恩こくおん澤山たくざん等らに至る道みちなり此國このくに人聊ひとしかた  
 が忠義ちゆうぎらじぎ處あはれども其實そのまことのまけおじみと我われつ張はりなり  
 至いたつて強國きやうこくありしが今時いまとき勢いきほひ少しもなじ常に迷まよひの雲くも一  
 面に充みちて思おもひ露つゆふん霧きりと拂はらふこと能あたはる手先てさき先さきくが  
 眞まこと闘たうらやみにして更さらは目的てきあてありし鷹たかは死ししても種こゝろと啄つます

武士ぶしの喰くひざれをば高揚たかあげ子こなどい左も高慢たかまんらしく將來のちに  
 望のぞむ抱いだくもの我われ獨ひとりりナレオン尿せ喰くらへ加藤かとう滿正まんせい兼かね  
 足あして逃にげだす彼かれ樊噲はんたいの勇ゆうありと我われ安やすんぞ項王きやうわうの威い  
 なからんやなき自分じぶん兇許けんこの大博士たいはくし千せんや萬まんの金かねならハ座ざし  
 せも得えれる事ことなりと仕濟しせいし切きつて何なにはなならせ兎うや角かくす  
 る其中そのうちにけや光陰くわういんの廻まわり來きて高慢たかまんせあるか今日けふのくらし  
 も何なにしたはれじや明日あしたの炊米まの工夫くわふに困こまお有様ありさまとあま  
 ぬるこそ氣きの毒どくなれ思し接せつ投首てうしゆう如何いかのせんと家内けいだい評議へうぎの其  
 出思しゆしひくに夫おとこれくに知己ちんぎの許もとに馳かけ廻まわわり何なになり蚊かなり  
 一の産業さんぎんを營いまんと頼たのまいすれど素もとより手馴てなれぬ事ことゆゑ  
 何分なにぶん糊口こく法ほうに苦くるしみしが漸しだくあると云いふ田いへ迷まよひの種たねを  
 類るいりに詩うたくと雖なども少すくしも實みならせ追々おそ々おそ疲弊へいへいして二進にしんも三さん

進もならざとれよりるる家具調度を賣代なし後悔よ  
 り渡りに舟を求めて福祿道金満山へ漕附けしも格別の事  
 もあらず浮かす必あらずも光陰を過せしとなり勿論此  
 國の人固より悪心邪念の所爲に無之も天光深く隣玉  
 ひつらん移住國內に思澤寺となん稱へつる寺堂を借り受  
 りてこれに其人々を住せしめ専ら回復の事を施行せしむ爰  
 より於ては各々鰻魚の良水を得たる如く我さきよ此布施に  
 預らんと蟻の甘さに属く如く骸兒の乳房を慕ふ如く活路  
 を得て始めて愁眉を開きしなり嗚呼迷へる哉此國人初手  
 に二心決定せば奈何修羅の街も苦しむべき二心の外味  
 方な世とゆ世人の知る所兵書にも百戰百勝と一忍に不如  
 之あり一以て之を貫く思ふ古人の金言なり

思澤山此山の樹林の皆な移住の木一面に繁茂し其下之  
 常に冷らるる暖からるるまじく温風薫く人々好んで此  
 山に登ぼる其昔し人多く登しよ女お救ひ神社と云ふを  
 取ひ仁惠朝臣を祭つる期日には無能興行を催す番附左の  
 如し  
 一難塙走  
 一陰辨慶  
 一困追太夫  
 一お祝也  
 一厭縣傳  
 一當世太夫  
 移住寺改革天王の御宇施徳年中奇特朝臣の開基にして  
 本尊は借錢大師因縁禪師の貧像を名刻して安置す近時此  
 寺に五百蛇瀝と座置を人々お開帳を俟ちて參詣せると云  
 ふ



賣

神田雄子町 巖々堂

元大坂町

法木徳兵衛

同小川町

秩山堂

京橋區南錫町

續文舎

捌

同元數寄屋町

普堂

此種書籍... 所... 擇... 堂... 同元數寄屋町... 普堂... 續文舎

維新 元勳 十傑 論

洋紙綴美本 定價金四拾錢

郵税不申受

右ハ我カ維新元勳西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、江藤新平、横井平四郎、大村益次郎、前原一誠、小松帶力、廣澤兵助、岩倉具視等ノ人ト爲テ痛論セル珍書ナリ世上ノ君子乞御愛覽アレ

現廟堂貴顯列傳

(洋紙摺美本各)定價金三十五錢 位石版背像入)郵税不申受

第一編(發兌)右ハ我政府現任廟堂ノ大臣始メ參議各省長官諸公維新前ヨリ目今迄ノ偉勳履歴ヲ詳記シテ細大洩ス所ナク巨品評ノ明確ナル從來世間ニ流布セル傳記ノ比ニアラズ之ヲ御愛讀アレ尙二編三編近刻順次號ヲ追テ大少輔海陸將校元老參事ノ兩議官各府縣シ長官等ニ及ビ第十編ニ至リ大尾ヲ結ハントス此段併テ茲ニ廣告ス

明清 國姓爺忠義傳

半紙摺給入全三冊 上卷三十五錢二、三卷近刻

右ハ國姓爺ノ事實ノ外論明清革命ノ事ヲ詳記セシ者にして殊に原本ノ誤謬を正し音訓を付け婦女子と雖も讀易からしむ且卷末に清國閩海鄭居仲國姓爺傳を其儘附録として大方の觀覽に供す尤も二、三卷は近日出版す乞を陸續御愛購あらんとを

傍訓 徵兵雜纂

全壹冊 正價前金十錢郵税不受

右ハ徵兵令御改正に付陸海軍の布達各府縣の同指令を始め或と新舊令を參照し或ハ各國兵備の摸樣を掲げ猶僧侶の門末へ諭せし文章等を記載す且つ一々傍訓を附け註

解を加へ丁寧深切を守り婦女子と雖も容易く解讀し一目の下に其疑義を晴らし心配を去らしむるの珍書也

○傍訓改正徵兵令 全壹册 正價前金十錢郵税不受  
右數度賣切候ニ付又々追刊仕候間猶一層の御愛讀を乞

歐洲情譜 群芳綺話 定價四十五錢 郵税共

慷慨志士 平野國臣傳 郵同 稅二十錢 共

岩倉具視公小傳 郵同 稅十錢 共

風流秘書 娛經 一名春經 郵同 稅十錢 共

芝區愛宕町貳丁目

脩正堂 敬白

樂會